
プライド

ぱるひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プライド

【コード】
N7900A

【作者名】
ばるひこ

【あらすじ】
俳優の国定京に巡ってきた初めてのドラマ。しかし監督の気まぐれでおじやんになってしまった。そんなことがあり落ち込んでいると、女優の足立未来みくが飲みに誘ってきた。そこで明かされる未来の思い。邪魔するプライド。二人のちよつと悲しいラブストーリー。

「国定京です！よろしくお願いします！」
俳優を始めて初のドラマ出演。ちょい役だけど気合いが入る！はずだったけど……
「悪いね〜急に監督が別の人がいいって言い出して」
まただ……運が無いと諦めるしかなかった。

「国定さん、すみませんでした！」
マネージャーの堺が謝っている。

もう目に入っていないかった。見ているのはこのドラマの主演・榎一葉。同じ事務所の後輩だ。正直悔しい。

「京君」

溜め息をついていると後ろから肩を叩かれた。

女優の足立未来^{みく}昔一度仕事をしたことがある。それ以来の友人だ。

「大変だね」

「しょうがないよ。そういう仕事だし」

苦笑した。

「京君いい演技するのに運が無いよね」

何故か未来は京の演技を高くかっている。

「運も実力の内って言うけどね。じゃあ頑張っつてね」

ここにいるとなんだか惨めな気分になってくる。

「じゃあね。……あ、まった！撮影終わったら飲み行こう。いつもの所にて」

京はああという中途半端な返事をして出て行こうとした。

今や視聴率二十%以上のドラマに出演している女優が、俺なんかと飲むなんて迷惑をかけるだけだ。そう思うと中途半端な返事になってしまった。後ろでは絶対に来てねと叫んでいる。

「堺。俺、仕事ある？」
帰りの車の中で聞いてみた。
「……すいません」
謝られると余計惨めな気持ちになる。
辞めようかな…

結局京は指定された飲み屋にいた。
未来が番宣のために出たバラエティー番組が放送されている。

「仕事欲しいな…」

また溜め息をついた。

「お待たせ」

サングラスをかけ、帽子をかぶった未来が隣に座った。変装しているがあまり隠せていない。

「随分早かったな」

「結構スムーズに撮影終わったから。生中」

座ると早速注文した。

「あの番組、あまり面白くないな」

バラエティー番組を見て言った。

「しょうがないでしょ。無理やり出させられたんだから」

ちようど出てきたビールを一気に半分ほど飲んだ。

「相変わらず飲むな」

「飲んでストレス発散しないとやってけないもん」

残りの半分も一気に飲み干した。すごい。

「苦労してんだな」

「当たり前でしょ！自己中な男優に、プライドだけ高い落ち目のベテラン。それにバカな監督。よくあんなので数字取れるよ」

かなりストレスが溜まっているようだ。売れたら売れたで大変なんだな。まだ文句を言っている。

「わかったから少し落ちつけ」

「ごめん」

やっと治まった。

「でも京も大変だよ。あんな監督のせいで」

憐れみの目で見えてきた。やめてくれ。悲しくなる。

「そうだ！今度出してくれるよう頼んであげようか！」

「いいよそんなこと」

未来にそんなこと頼めるわけない。

「遠慮しなくていいよ」

しつこく言ってくる。

「いいつて言ってるんだろ！！」

無意識に叫んでいた。

「いくら俺だつてな、プライドがあるんだよ！」

未来が驚いた顔でこちらを見ている。それはそうだ。親切心で言っ

ているのに、その相手に怒鳴られたのだから。

「ごめん…」

未来が謝った。

怒りと羞恥心と感謝の気持ち複雑に入り組む。違う…本当は感謝

しないといけないのに…。

「ごめん…」

未来がもう一度謝った。謝らないでくれ。俺が悪いんだから。

周りの客も皆こっちを見ている。ヒソヒソと小声で話している人も

いる。まずい。バレたか。

「もう帰ろっ…」

「…」

促すと無言で立ち上がった。

「怒鳴ってごめん…」
店を出ても未来は何も喋らなかった。代わりにうつすらと涙を浮かべている。
「家まで送るよ」
無言で頷き、ゆっくりと歩き始めた。

「ごめん…」

途中で未来が呟いた。

「私、何も考えてなかった」

よわよわしい声だ。テレビ局で励ましてくれた時の声と全く違う。

「違う。俺のこと気遣ってくれたのに、カツとなつと…」

「違う！」

未来が立ち止まった。

「違う…私は自分のことしか考えてなかった。京の気持ちなんて考えてなかった」

今度は声をあげて泣き始めた。何も出来ずただ見ているしかなかった。

俺が悪いのに…お願いだから泣かないでくれ。そんな悲しい顔見たくない。

「京に…喜んで欲しくて、私を見て欲しくて……私…」

俺は

「京が好き」

未来を愛している

「初めて会った時から」

それより前から

でも俺なんかじゃだめだ。

「冗談言つなよ」

ふざけた調子で笑った。上手く笑えたかな？

「冗談じゃないよ！本気で好きなの…」

「嘘だ」

「嘘じゃない」

「…」

「…」

「…ごめん」

未来が俯いた。今度は泣いていなかった。

「帰ろう」

出来るだけ優しい声をかけ、また歩き始めた。未来は後ろからゆっくり着いて来る。

これでいい。俺なんかを好きになったらいけないんだ。彼女は俺なんかと違うんだから。

自分に言い聞かせた。何度も何度も…

家に着くまで二人は一言も喋らなかった。

「未来…」

後ろを振り向いた。はっとした。俯いたまま泣いている。声を出さずに。涙だけがコンクリートに落ちている。

それを見た瞬間、本当に良かったのか分からなくなった。

愛していると言いたい。自分の本当の思いを伝えて抱き締めてあげたい。

「ばいばい」

かすれた声で未来が言った。

未来の後ろ姿をただ黙って見るしかなかった。

その姿も、家の中へと消えていった。

「これでいい…これでいいんだ」

小さく呟くと来た道をゆっくりゆっくり戻って行った。立っていたコンクリートが濡れているのは気のせいだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7900a/>

プライド

2010年11月2日03時36分発行